

稱讚 二〇九号

二〇二〇年五月一日発行

弥陀の誓願不思議にたすけられま
あらせて往生をばとぐるなりと信
じて念仏申さんとおもひたつこ
ろのおこるときすなはち撰取不捨
の利益にあづけしめたまふなり。

『歎異抄 第一系より』

あるご門徒さんから 命をお預かりして
いる間は、お返し来る日まで、大事に過ご
して参りたい」と、つい先日米寿を迎え、
実姉がお仏壇に遺していた色褪せた手紙を
見て、胸に響いたものだからと、メールを
頂きました。

私のこの 「いのち」も 阿弥陀さまから
お預かりした 「いのち」で、お預かりした
から、返すのだと、昔から言い習わされて
いたことに、あらためて、思い出したこと
で、その門徒さんにお礼申しあげたこと
がありました。

そう言えば、『歎異抄』に あづけしめ
たまふなり」という一文があります。



発行 浄土真宗本願寺派 稱讚 寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanji.com

四月二四日 金 夕方五時 築地本願寺とつじ

撰取不捨の利益にあづけしめたまふな
り」は、撰取不捨の利益」は「を」では
なく、「に」であります。「を」だと後の
文は「あづからしめたまふなり」になり、
撰取不捨の利益を受けさせなされる」とい
う意味ですが、そうではないようです。
あづけしめたまふ」とは、「あづく」

命令形「あづけ」＋「む」使役・
尊敬の未然形「む」＋「たまふ」補助
動詞・尊敬の意を表す）で、「お預けくだ
さる」の意味になります。または、「たま
ふ」を他動詞の謙譲語とすれば、「預けさ
せてくださる」の意味になるうかと思いま
す。この私の「いのちそのものを、この現実
の今既に「撰取不捨の利益」に包んでくだ
さる」ということでしょうか。言い換えれば、
お預かりしたこの命だった」と気づかさ
れることではないでしょうか。

あらためて、「お預かりした 命」と
聞き、この命、私自身の命ではなく、ま
た、私からお願ひして頂いた命でもなく、
阿弥陀さまから、依に成る 命」とし
て、私の意思に関係なく、預けられた
命「だからこそ、尊い」のだと言うこ
とが、「撰取不捨の利益にあづけしめたま
ふなり」かと思えるのです。

どの命も「かけがえのない」から尊いと
いうより、どの命も仏さまから預かった仏
と成る命だからこそ、尊く大切にすること
なのだと思えます。

合掌



四月八日は、お釈迦さまのお誕生日です。稱讃寺では、五日に、「灌仏会法要」を行おうとしていました。「不要不急」の外出は自粛しましょうとの声があがっている時でしたので、お参りはありませんでした。七日になりますと、安倍首相から「緊急事態宣言」が発せられました。世界には、多くの方が集まって、祈れば、「コロナは収まる」と信じる？宗教があるみたいですが、真の仏教は、そういうものではありません。ことをご理解ください。

親鸞聖人がお生まれになられる少し前から、ご往生されてまでの約一世紀、日本ではどのような災難が起こったのでしょうか。今回は、その百年を時系列で記載してみました。

一五九〇年～一六〇〇年	平治	平治の乱	二二九〇年～二二九二年	寛喜	寛喜の大飢饉
一六〇〇年～一六〇一年	永暦	飢饉・痘瘡・はしかの流行	二二九二年～二二九三年	貞永	地震
一六〇一年～一六〇三年	応保	天変や痘瘡の流行	二二九三年～二二九四年	天福	地震
一六〇三年～一六〇五年	長寛		二二九四年～二二九五年	文暦	地震
一六〇五年～一六〇六年	永万		二二九五年～二二九八年	嘉禎	天変
一六〇六年～一六〇九年	仁安		二二九八年～二二九九年	暦仁	天変・地震
一六〇九年～一六〇七年	嘉応	天変・痘瘡が朝廷に侵入	二二九九年～二四〇〇年	延応	彗星・地震
一六〇七年～一六〇五年	承安	痘瘡の流行	二四〇〇年～二四〇三年	仁治	風疹大流行
一六〇五年～一六〇七年	安元	大極殿の火災	二四〇三年～二四〇七年	寛元	内裏の火災
一六〇七年～一六〇八年	治承	養和の大飢饉	二四〇七年～二四〇九年	宝治	赤斑痘瘡流行
一六〇八年～一六〇八年	養和	平家滅亡	二四〇九年～二四〇七年	建長	五条大宮炎上
一六〇八年～一六〇八年	寿永	巨大地震	二四〇七年～二四〇九年	康元	正嘉の飢饉
一六〇八年～一六〇八年	元暦		二四〇九年～二四〇九年	正嘉	正嘉の飢饉
一六〇八年～一六〇八年	文治		二四〇九年～二四〇九年	正元	正元の飢饉
一六〇八年～一六〇八年	建久		二四〇九年～二四〇九年	文応	
一六〇八年～一六〇八年	正治		二四〇九年～二四〇九年	弘長	親鸞聖人往生
一六〇八年～一六〇八年	建仁		二四〇九年～二四〇九年	文永	
一六〇八年～一六〇八年	元久		二四〇九年～二四〇九年	文永	
一六〇八年～一六〇八年	建永		二四〇九年～二四〇九年	文永	
一六〇八年～一六〇八年	承元		二四〇九年～二四〇九年	文永	
一六〇八年～一六〇八年	建暦		二四〇九年～二四〇九年	文永	
一六〇八年～一六〇八年	健保		二四〇九年～二四〇九年	文永	
一六〇八年～一六〇八年	承久		二四〇九年～二四〇九年	文永	

現代は、天皇が交代すると、元号が変わりますが、以前は、何かが起こる度に、元号を替えて、社会が良い方向に向かうことを願っていました。

親鸞聖人がご存命中でも三十四回元号が変わっております。それだけ、その時代は、頻繁に自然災害や病気が流行し、飢饉が起こっていたのです。そう言う時代、人びとはどのような「生死」を捉えていたのでしょうか。

ウイルス どう共生するか

■コロナとの向き合い方 人間が拡散

歌人、細胞生物学者
永田 和宏氏

「今、私たちの働き方、生活スタイルが変わりつつあります。」

「オンライン飲み会などと不可思議の会にたがひにグラスをかわす」という歌は、教え子との興隆を詠んだ近作です。人との距離感、職場や学校での他者との関わり方が、大きく変わりました。ひとりの自由さと、他者との関係のかけがえのなさ。その両面の間で、人間関係を根本から見直す時期がきていますね」

ただ、マイナスばかりではありません。いじめに悩む子どもにとっては、学校を一時離れることは、『ここだけが世界じゃない』と気づく機会になるかもしれない。これまで、職場で会議に追われてきた私も、渠まらなくてもいい会議がこんなに多かったのか』と気づかされました」

「科学者としてウイルスの正体をどう捉えますか。」

私の専門はたんばく質の働きなど細胞の研究で、ウイルス学ではありませんが、私の考える生命の定義は三つあります。一つ目は膜によって下界と区切られていること。二つ目は遺伝子を複製して子孫を残せること。そして合成や分解などの代謝活動を行うこと。ウイルスは最初の二つの条件を満たしますが、代謝はしません。遺伝子の複製などの生命活動を行うためには、宿主の持つタンパク質を借りる必要があります。ヒトや動物など、他の生命がなければ増殖できない存在です。私自身はウイルスは生命だと思っていませんが、最近では、生命と非生命の

境界線上のウイルスも発見され、ウイルスを生命と考える人も増えてきています」

「新型コロナウイルスの特徴は？」

インフルエンザウイルスなどは多くの人がかかって免疫を持つと、それが防波堤となり拡散が抑えられます。SARS 重症急性呼吸器症候群) の場合は、患者を隔離しやすかった。新型コロナウイルスは、感染者に症状が出る前に他人にうつしてしまうので知らないうちに広がり、一番厄介です。世界が一つの生活圈となつたからこそ起きている現象。ウイルスが広がっているのではなく、人間がウイルスを拡散している」

■情報隠蔽が感染拡大招く

齋藤茂吉

「人類の歴史から学ぶことはできませんか。」

百年前に流行したスペイン風邪は、情報の隠蔽が感染を拡大させたといわれます。第二次世界大戦の戦場で広がったが、参戦国は戦局が不利になるのを恐れ、事実をひた隠しにして感染が拡大した。中立国・スペインだけが情報を開示し、スペイン風邪と呼ばれるようになった。新型コロナウイルスの場合、中国・武漢の医師が昨年末の時点で、警鐘を鳴らしたにもかかわらず、当局は『マダ』として医師を処分した。あつてはならないことで、情報開示がいかに大切かが分かります」

「スペイン風邪をテーマにした『へばりかぜ』に権りし茂吉の詠ひたる『現ともなし』は生じの境』という作品を詠まれていますね。」

スペイン風邪は当時、日本でも猛威をふるい

ました。歌人の齋藤茂吉は「寒き雨まれまれに降りはやりかぜ衰へぬ長崎の年暮れむとす」と他人ごとのような歌を詠みましたが、自らが感染した後では「はやりかぜ一年おそれ過ぎ来しが吾ひ臥りて現ともなし」と切迫した歌になりました。生死の境をさまよったといわれています」

■人間の遺伝子に由来物質

道半ば

「新型コロナウイルスは、今後強毒化する可能性がありますか。」

新型コロナウイルスはRNAという遺伝子の鎖を一本持つRNAウイルスです。よく知られるDNAは二本の鎖が二重螺旋をなしているため、一か所に変異が起きてももう一本の鎖の影響で元に戻りやすい。これに対し、遺伝子の鎖が一本だけのRNAウイルスは変異が起こりやすいといえます。つまり強毒化する可能性も弱毒化する可能性もある。弱毒化すれば我々の体内に残るでしょう」

「人類はウイルスを克服できますか。」

我々の遺伝子にもウイルス由来のものがあります。例えば、胎盤が機能するのに必須のシンチンというタンパク質はウイルスに由来します。人間は、ウイルスの助けを借りて子どもを産むということです。『ウイルスは敵』と思いがちですが、ウイルスの情報を自分の遺伝子の一部としてため込んでいるのが人間という存在。人間はウイルスとずっと共生してきた。ウイルスは撲滅しようとしても駄目で、いかに共生を図るか。ウイルスとの共生はまだ道半ばかもしれない」

(読売新聞) 四月二五日朝刊抜粋

親鸞聖人御誕生八五〇年

立教開宗八〇〇年

慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

親鸞の生涯とその思想 〔二〇一〇～二〇一七〕

光明を求めて

六角堂参籠と女犯偈 行者宿報偈

建仁元 (二〇一〇)年、親鸞は二十年間修行を積んだ比叡山を降りる決意をした。向かった

先は京都洛中、六角堂(頂法寺)。ここは聖徳太子が大坂四天王寺を建立するために木材を探しに来た際に立ち寄ったと伝承される太子開基の寺で、本尊は如意輪観世音菩薩。太子を敬慕する親鸞は、後世をいのらせたまひける「恵

信尼消息) ために百日の間、ここに籠もることを決めた。そして九十五日目、太子の示現を得る。行者宿報偈、一般に「女犯偈」といわれる夢告を得たのである。親鸞夢記』には端正な顔立ちをした僧形の救世観音が示現して

行者、宿報にて設け女犯すとも
我、玉女の身となりて犯せられん

一生の間、能く莊嚴して
臨終に引導して極楽に生ぜしめん

と、以上の文を誦して、これは私の誓願だから

ら数千の有情(うじょう) 大(おほ)びとに説きなさい」といわれたところで親鸞は夢から覚めたとき書かれています。当寺と今とでは夢の持つ意味はまったく違っていたといわれ、この夢告が示す意味は大きい。女犯(にょはん) 煩悩(ぼんごう) あるいは罪業(ざいごう) を誰にでもありうる前世(ぜんせい)からの報(むく)いととらえた点、さらに罪業は救世観音の慈悲によって救済されるとした点、さらに親鸞にそれを人びとに伝えなさいとしていた点で、その後の親鸞の行動を決定づけている。在俗のままに出家した人びとを集めて往生を説く法然の元へ、迷わず向かわせたのだ。恵信尼消息』によれば、雨(あめ)の降る日にも晴れた日も、どんなに大事な事柄にも優先して通いつめたのである。そして、愚禿(ぐとく) 積(つ)の

鸞、建仁辛酉(けんにんしんしゅう)の暦(れき) 雑行(ざつぎょう)を棄(す)てて本願(ほんがん)に帰(かへ)す(『教行信証』化身土文類後序) があるので。

吉水時代、法然の下で本願に帰す

親鸞二十九歳から三十四歳まで、法然の下で学んだ時代を吉水時代といい、次頁に続く吉水時代の親鸞』で鎌田宗雲氏は親鸞がもっとも至福(しふく)の時間であった」と述べている。専修念仏(せんじゆねんぶつ)を説く法然(はつねん)の吉水(きすい)の草庵(そうあん)は、枝垂桜(えだしずざくら)で有名な円山公園(えんざんこうえん)を上(あ)がった東山(とうざん)の華頂山(けりやうざん)中腹(ちゆうぶ)にあり、道俗男女(だうじやくなんにょ)、多く(おほく)の人が参集(さんじつ)していた。法然(はつねん)の説く専修念仏(せんじゆねんぶつ)とは、念仏(ねんぶつ)は阿弥陀仏(あみだぶつ)の唯一(ごうい)の本願(ほんがん)だから阿弥陀仏(あみだぶつ)の名(な)さえ称(な)えていれば誰(たれ)もが往生(おうじやう)できる」というものだった。いわ

ゆる旧仏教(きゅうぶつぎょう)が反応(はんおう)したのはこの「唯一」という点であった。法然(はつねん)の主著(しゅしやく)「選撰本願念仏集(せんじやくほんがんねんぶつじゆ) (選撰集(せんせんじつ))」は選撰(せんせん)という言葉が使われているように諸行(しよぎやう)を否定(ひてい)し、その時代(じだい)には主流(しりゅう)だった「法華經(ほふくわきやう)」まで否定(ひてい)したところに、猛烈(めいれつ)な反発(はんぱつ)が起きていった。

では阿弥陀仏(あみだぶつ)の唯一(ごうい)の本願(ほんがん)とは何(なに)なのだろうか。これは鎌田(かみた)氏の「吉水時代(きすいじだい)の親鸞(しんらん)」に詳しいが、阿弥陀仏(あみだぶつ)は前身(ほんしん)の法蔵菩薩(ほふざうぼさつ)の時代(じだい)に四十八(しじゅうはち)の誓(ちか)いを立て(たて)て衆生(しゆじやう)済度(じやくじやく) 往生(おうじやう)を行(な)じた。これを阿弥陀仏(あみだぶつ)の四十八願(しじゅうはちがん)といい、浄土教(じやうどけう)の根本思想(こんぽんしゆしゆ)ともいえる。法然(はつねん)が選(せん)んだのは「... 十方(じふぱう)の衆生(しゆじやう)、至心信樂(ししんしんぎやう)して、わがくに生(な)ぜんとおもうて、乃至十念(ないじしじゆねん)せん。...」という念仏(ねんぶつ)こそ浄土(じやうど)に往生(おうじやう)できると説(と)いた十八願(じゅうはちがん)である。いずれにしても「選撰(せんせん)する」ことで、他(た)を

否定(ひてい)した」ことになり、元久元(げんきゆう) (二〇四)年(ねん)、比叡山(ひえいざん)から念仏(ねんぶつ)停止(ていし)が求め(と)られ、法然(はつねん)は「宅箇条(たくかじょう)の制誡(せいがい)」を示(し)して念仏(ねんぶつ)集団(じつたい)に自戒(じけい)を促(うなが)している。親鸞(しんらん)も他(た)の弟子(でし)とともに八十七番目(はちじゅうしちばん)に「僧綽空(そうしやくくう)」の名(な)で署名(しやうめい)している。しかし、翌年(ごうねん)には興福寺(きやうふくじ)から九箇条(くじゅうかじょう)にわたって念仏(ねんぶつ)集団(じつたい)の過失(くわしつ)を列挙(れつぎよ)して禁止(きんし)を訴(う)える奏状(そうじやう)が朝廷(てうてい)に出(だ)された。当初(しんじゆ)は関白(せきはく)九条兼実(くじゅうかみね)なども専修念仏(せんじゆねんぶつ)の信奉者(しんぽうしや)であり、朝廷(てうてい)も念仏(ねんぶつ)停止(ていし)には緩(ゆる)やかな態度(たいど)であったといわれている。が、やがて事態(じたい)は一変(いちへん)。建永(けんえい)の法難(ほふなん) または承元(じやうげん)の法

難(なん)へと発展(はつぜん)する。

吉水時代の親鸞

鎌田 宗雲氏

聖から俗へ

存覚の『嘆徳文』に、比叡山で修行をはじめて二十年たったときの心情を、定水ヲヨラストイヘドモ識浪シキリニウゴキ、心月ヲ観ズトイヘドモ妄雲ナヲオホフ」と描写している。これから、修行をしながら、悲嘆にくれ、不安や苦悩におびやかされ、いままでの価値体系がくずれてきている状態であったことが想像できる。どんなに修行しても煩惱がなくならない自分を痛感していたのである。この苦悩を解決するために選んだのが六角堂の百日参籠であった。六角堂参籠は九十五日目の暁に夢告を得て中止し、後世のたすかる縁を求め、ついに法然に出会ったという。どうして六角堂参籠を実行したのか、どのような夢告を得たのか、どうして法然をたずねたのかを示す史料が現存しない。この疑問は、大正十（一九二二）年に西本願寺から発見された恵信尼の手紙十通のなかで答えを見いだせる。そこに、

後世のたすからんずる縁にあひまゐらせんとたづねまゐらせて、法然上人にあひまゐらせて、法然上人にあひまゐらせて、また六角堂に百日籠もらせたまひて候ひけるやうに、また百か日、降るにも照るにも、いかなる大事にもまゐりてありしに、ただ後世のことは、よき人にもあしきにも、お

なじやうに生死出づべき道をば、ただ一すぢに仰せられ候ひしを・・・

（恵信尼書状「第三通」）

と伝えている。平松令三氏は、法然をたずねたことについて、『親鸞』のなかで、『親鸞夢記』の文から考えると、救世観音の告命、つまり、在俗のままでの仏道修行と民衆に宣布するという使命を実行するために法然を選んだはずである。当時の法然の下には、沙弥・沙弥尼と呼ばれた在俗のままの出家者が多く集まっていたことが親鸞を惹きつけた、と考えられる」と推測している。かくて、終生の師と仰ぐ法然に出会うのであるが、すぐに師事をしたわけではない。身についていた天台の教えから、専修念仏の教えを自分のなかに受け入れるには、百日の時間が必要だったと恵信尼の手紙に記されている。範宴（親鸞）は法然をどのやうにみていたのだろうか。『高僧和讃』に、

曠劫多生のあひだにも

長いあいだに専修念仏の教えを聞いていた人は数知れぬくらい多い。師の「選択集」を見写する許可をもらうのはまれである。そんな中でこの私が許可されて、そのうえ肖像画を描くことが許可されたのはなんと不思議であり幸せなことであろうか。

取意 教行信証「化身土巻」

と、師資相承ししそうしやうの出来事を感じしながら記している。血脈相承けちみやくが一般的であるが、法然は相手によって三とおりの師資相承の儀式を使い分けている。まず円頓菩薩戒えんどんぼさつがい。そして、「選択集」の見写許可と加筆付与。真影図画の伝授である。法然は三種類の師資相承の儀式を並行しておこなっているが、その使い分けの理由は定かでない。使い分けの理由は伝授されたひとから想像するしかない。その痕跡を調べると、

- (一) 善信房親鸞 (教行信証「御伝鈔」)
- (二) 善恵房証空 (『選択集要決』 秘聚百因縁集)
- (三) 真観房感西 (『選択集蜜要決』)
- (四) 長楽寺隆寛 (『明義進行集』 秘聚百因縁集)
- (五) 聖光房弁長 (『徹選択集』 秘聚百因縁集)
- (六) 法蓮房信空 (『法然上人行状絵図』)
- (七) 正信房湛空 (『法然上人行状絵図』)
- (八) 勢観房源智 (『法然上人行状絵図』)

九) 九品寺長西 (『法然上人行状絵図』)

十) 成覚房幸西 (『法然上人行状絵図』)

の人びとが儀式を受けている。この師資相承は念仏の教えをかなり理解していると認められた人だけになされた儀式である。

また、「御伝鈔」は吉水時代の二つの出来事を伝えている。まず、「信行両座」である。善信(親鸞)が法然に、信心を重視する信不退と称名行を重視する行不退に分けて、門弟の心を確かめたいと進言して、記録係をつとめる許可をとったことがある。その結果、信不退の座は安居院法印聖覚、法蓮房信空、熊谷入道直

実、善信(親鸞)の四人だけであった。最後に法然が信不退の座につくと、多くの弟子たちが敬意と後悔の表情をしたと伝えている。大正十一(一九二二)年に中沢見明氏が「史上之親鸞」に「御伝鈔」の信憑性を疑い、親鸞が法然の継承者であることを示すための物語だとい

い、信行両座は史実ではないと断定している。昭和三(一九二八)年に山田文昭氏が「真宗史稿」を著わして反証し、「御伝鈔」の内容はほぼ史実に間違いない



ことを論証している。赤松俊秀氏は「親鸞」で疑問を遺しながらも、一念義と多念義の対立を指摘して、「信行両座」

はありえないわけでもない」と見解を述べている。この出来事の有無は史料がないので不明であるが、「御伝鈔」は親鸞が遺弟からの聞き取りだから、関東地方に伝承されていたのであろう。



もうひとつの出来事は「信心諍論」である。これは正信房、勢観房、念仏房と善信親鸞の論争である。善信親鸞が聖人の御信心と、善信が信心といささかもかはるところあるべからず」というと、兄弟子がひとしと申さるるこいはれなし、いかでかひとしかるべき」と詰め寄った論争である。このことを法然に尋ねると、阿弥陀仏の他力回向の信心だから、誰の信心もひとしく同一である」と取意と裁定があった。まったく同じ内容が、「歎異抄」十九条に出てくる。そういうことから、この出来事は実際にあったことと想像される。

法然のもとで

さて、親鸞は法然のもとで学んだ専修念仏の教えをどのように深化していったのか。身につけていた聖道門の教えの殻はなかなかとれなかったであろう。親鸞の生き方そのものを変えた法話はどのようなものであったかを想像してみる。仏教は成仏を目的とする教えで、仏に成る世界が浄土である。釈尊入滅から遠大な時間を経て今は末法の時代である。仏に成るための能力と資質は劣り、さとりをひらくための修行が不可能な時代である。末法の時代とその時代に生きる人間の資質（時機）にふさわしいものが念仏の教えである。末法の時代にこそ念仏の教えは輝きをましてくるのである。經典の読誦なども往生浄土の行業だが、称名念仏に勝るものでない。阿弥陀仏の名を称える念仏こそ、阿弥陀仏の願いにかなっているのである。

法然はこの称名念仏を「正定業」と定めた。

法然はさまざまな行が念仏に取り込まれたありかたを諸行往生といい、称名念仏の念仏往生と区別して、阿弥陀仏の本願は称名念仏だけである、それ以外は不必要と教えている。

法然は四十八願のなかの第十八願を中心の願として選択し、念仏はもつともすぐれた往生行であり、だれでもが簡単にできる往生行であるとしている。念仏者は生涯を通じて称名念仏するのが望ましいが、できなければ一回の念仏でも、浄土へ往生することが可能であると説く。王本願とか念仏往生の願といい、この本願です

べての人びとが阿弥陀仏に救われると説いているのが特徴である。これは中国の善導の影響である。

法然は『観経疏』善導が著わした観経（無量寿経）の注釈書を生涯の指針にしており、自らは「偏依善導一師」といって、善導の教えに導かれて生きていることを表明している。

親鸞聖人



法然聖人



親鸞聖人が法然聖人と出会う一二〇一年から一二〇五年、法然聖人の『選択本願念仏集』の書写と真影絵図の写しの許可を得た四年間ほどは、左記のように（二頁の中段にも掲載）、比較的、大きな災害、感染症などの流行は起きていないようです。

- 一九九九年～二〇〇一年 正治
- 二〇〇一年～二〇〇四年 建仁
- 二〇〇四年～二〇〇六年 元久
- 二〇〇六年六月二二日（元久三年四月二七日）に赤斑瘡流行、元久から建永に元号が変更された。
- 二〇〇六年～二〇〇七年 建永 天然痘と台風災害
- 二〇〇七年 建永（二年二月一八日）
- 二〇一一年 建暦元 年十一月 承元 建永の法難
- 二〇〇七年一〇月～二〇一一年 承元

その間は、政治的、社会的情勢においては、落ち着きはなかったことでしょうが、少なくとも、親鸞聖人にとっては、本当に充実した時期だったことでしょう。

法然聖人の門弟の間で、「信行両座」「信心諍論」のように、「ご自身の「ご本願」「ご信心」等の教義理解に没頭できたのではないかと思います。言い方は失礼な事かも知れませんが、机上での教義理解だったかも知れません。それが、「承元（建永）の法難」を受けるころから、現実を直視し、流罪にあってからは、民衆が何を頼り、どう生きているのかを目の当たりにして、決して、大衆迎合に染まることなく、ご本願のみ教えを伝えていかれたのではないのでしょうか。

それも、法然聖人のもとで、四年間の研鑽の賜だったのではないかと思います。

稱讚寺 行事予定

二〇二〇年 五月の行事予定

※「不要不急」の外出はお避けください。

- 三日 日曜礼拝 午前九時
- 六日 水 門信徒の集い 午後一時
- 一〇日 日曜礼拝 午前九時
- 六日 土 のんのん法話会 午後二時
- 七日 日曜礼拝 午前九時
- 一四日 日曜礼拝 午前九時
- 一六日 火 日曜礼拝 午前九時
- 三日 日曜礼拝 午後一時
- ※二日 木 築地本願寺親鸞聖人降誕会 は、この度は中止になりました。

二〇二〇年 六月の行事予定

- 六日 土 門信徒の集い 午後一時
- 七日 日曜礼拝 午前九時
- 一四日 日曜礼拝 午前九時
- 六日 火 のんのん法話会 午後二時
- 一二日 日曜礼拝 午前九時
- 一六日 金 のんのん法話会 午後二時
- 一八日 日曜礼拝 午前九時
- 永代経法要 午後一時

二〇二〇年 七月の行事予定

- 五日 日曜礼拝 午前九時
- 門信徒の集い 午後一時
- 六日 月 のんのん法話会 午後二時
- 二日 日曜礼拝 午前九時
- 歡喜会法要 午後一時
- 六日 火 のんのん法話会 午後二時
- 九日 日曜礼拝 午前九時
- 一六日 日曜礼拝 午前九時
- 親鸞聖人を知ろう 午後一時

編集後記

正直、新型コロナウイルスは恐いです。亡くなられた方を「ぐらしか」「鹿兒島弁」と思っています。医療従事者の皆さんの献身的な働きに感謝し、頼るだけの私です。この間、この二月結婚したばかりの脳神経内科の医者である親戚にお礼かたがた「天変だね」と電話したら、明日から感染症科の方に手伝いに行くことになりました」と言うので、気をつけて」としか言えませんでした。何も出来ない私は、せめて「医療崩壊」しないよう、感染予防と拡散防止のため、不要不急の外出を避け、マスクをして、こまめに消毒液を使って手を洗うことに努めるだけです。

報道では、新型コロナウイルスとの戦争、戦い」と叫ばれています。この間、役所でも、勝ったお祝いで・・・と聞きました。医療者は最前線で闘ってくださっているから・・・とも聞きます。緊急事態、非常事態であることは間違いないことです。それでも、ウィルスに敵対視する私たちの感情、というものは正しいのでしょうか。その感情一つが他にも影響するのではないかと。どんな病気でも闘病」という言い方も正しいのでしょうか？専門家会議の方から「ウィルスとの戦争」という表現は止めてとの警鐘がありました。

二〇二〇年度 稱讚寺門信徒会費

- 年会費 六千円
- 振込先 城北信用金庫 「ツ家支店」
- 名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会
- 代表 北村 信也
- 口座 普通 6176051

み 見ているよ

し 知っているよと 仏さま

二〇二〇年 心のともしび「五月カレンダー」より